

## I カインの末裔 (有島武郎)

赤ん坊をおんぶした女と男が、北海道・胆振のマッカリヌプリ(羊蹄山)を歩いていた。いっしょに歩くのは、荷をのせたやせ馬だった。内浦湾(噴火湾)から吹く風は強くて寒い。やがて夫婦は国道に入り、松川農場を目指している。そして、K市街地にやってきた。蹄鉄屋の前では男たちが槌で蹄鉄を打っていた。夫婦はその鞆の火に温かみを感じ、しばらく見入っていた。少し元気を取り戻してから、最終目的地はここではないと気付いたようで、夫婦はそれからまだ3町ほど歩いた。そこでやっと、松川農場の事務所を見つけることができた。夫婦の亭主は、中に入って長火鉢のそばにいる男に話しかけたが、亭主の話は要領を得ず、その男は手荒な言葉を返してきた。その男とは別の帳場に座っていた男が、どうやらこの亭主の素性をつかんだようで、亭主を机のほうへ案内し、それから紙を取り出して、ここに署名をするようにいった。その紙には、この亭主の名前と生まれ故郷などがすでに記されていた。この亭主の名は、広岡仁右衛門。さっそく言われたとおりそれに署名した。仁右衛門はついでながら、持ち合せがないので金を貸して欲しいと言ったが、帳場の者らはそれを断り、「それなら、あんたの知り合いの川森に頼め」と言った。女房のおんぶした赤ん坊がずっと泣いていたので、気の毒に思った帳場の笠井という男が、彼らの今夜の泊まり所となる川森の小屋を教えてくれた。夫婦の風貌と挙措は、いかにも世間知らずといったもので、この笠井の案内に、ろくなお辞儀や返事もできず、ただ教えてもらった方向に向かって歩くだけだった。赤ん坊はずっと泣いていた。がともあれ、仁右衛門夫婦は松川農場の小作人になれた。彼の小屋の1町離れたところに、佐藤与十という小作人がいた。ここは子だくさんで貧乏所帯。その女房は元気で、加えて不思議な色気を保っていた。二人は早速に畑仕事をした、他の家なら冬支度をしだすころだか、二人にとっては、まずは荒れた畑を、畑らしくすることから始めなければならない。とりあえず秋蒔小麦の畑を確保した。冬には、マッカリヌプリの麓の官林に入って木を伐ったり、岩内では鯉場稼ぎもした。食料が不足しそうなだったので、痩せ馬を売ってしのぎ、何とか冬が越せそうな目処が立った。彼は37歳、体躯頑丈で6尺余りの丈だった。疲れを知らない野獣のように働いた。

ところが、彼は与十の女房と関係ができつつあった。小高い丘の樹林の鎮守の社で二人が密会しているところへ、やってきたのは笠井だった。“怖いものなしの仁右衛門”にあって、“まずい”と思った笠井は早々に立ち去った。ところで、与十の女房は草むらに隠れていたが、笠井の去ったあと、ひょっこり出てきた。彼は彼女を手粗にあつかいながら戯れていた。

六月、北海道には珍しく長雨となった。仁右衛門は、市街地の運送店へ車力を引いていったが、あいにくの雨で荷の運送依頼は全くこず、店先で何人かと博打を始めたが、そこで大分負けが込んでしまった。むしゃくしゃして彼は子供らを殴りつけた。また集会所で、小作人らが集まり函館の農場主と談判が行われていたので、そこへ乗り込み、佐藤の横面を張り倒した。そしてまたもどこかの賭場に行ってしまった。彼は居酒屋で酒をあおり、女と戯れた。上機嫌で家に帰ってきたら、子どもが赤痢で危篤だった。懸命の看病をしたが、子どもは亡くなった。彼は「笠井のやつめが殺したんだあ」と詛もなく叫んだ。彼はさみしく、マッカリヌプリや昆布岳のよく見える共同墓地に埋葬してやった。女房は号泣していた。

盛夏が過ぎて秋の収穫期になった。農繁の真最中に馬市が立った。ここでは馬の売買のほか競馬も行われる。仁右衛門は競馬に興じた。陸軍糧秣廠へ納めるべき燕麦のことなどを忘れてそれを賭けに出した。それどころか、自分自身が騎手になって出場した。レースが始まった。最初はゆっくりしていたが、ゴール近くになったとき、彼は鞭をあてがって一気に先頭に躍り込んだ。そのとき、農場主の子供がレース場によちよちと入ってしまった。それに気付いた笠井の娘がそれを追っ掛けた、仁右衛門はとっさに避けようとしたが、身は反り返ってしまい空中高く放り出されて、やがて地面に打ち付けられた。人々は急いで周りにあつまった。仁右衛門は傷を負わなかったが、馬は前足を二本折ってしまった。仁右衛門は自分で自分が分からないような状態で、自分の小屋に戻ってきた。そこには、けがをした馬が、天井から前足を吊られた姿で横たわっており、家の中は消毒用の石炭酸のにおいがただよっていた。

次の日に、騒ぎが起こった。笠井の娘が、川沿いの窪地の林の中で失神して倒れていた。幸い意識は回復したが、大きな男がやってきて乱暴したという記憶しかなかった。一方で、仁右衛門が下手人だとの目撃情報が出てきた。警察は慎重に捜査した。ところで秋の収穫のことだが、長雨がたたり小作人らは物納が履行不能になっていたが、彼は平気の平左だった。季節は冬になった。事務所の人は、いよいよ強硬手段をとり、彼に小屋を出ていけと要求してきた。

彼は、函館にいて農場主と掛け合ったが、彼はじつとにらむだけ。呆れた農事主は怒鳴って出て行った。彼はもうこれだけで圧倒されてしまった。そして、再び、遠路の小屋に戻って行かざるをえなかった。嵐は何日も続いた。仁右衛門は酒に入りびたっていたが、あるとき、急に、死んだ馬の生皮をはがしにかかって、ここを出て行く用意をしだした。身一つで持てるくらいになるのに、それほど時間はかからなかった。天と地は雪で一つになっていた。さっと風が吹くと、積雪は舞い上がり、それが横なぐりになびいて矢よりも速く空をとんだ。大きな荷物を背負った二人の姿はまるびがちに少しずつ動いていった。共同墓地の下を通るとき、女房は手をあわせてそっちを拝みながら歩いた。するどい高い声をあげて泣きながらだった。思えば、二人がこの村に入ったときには、一人の赤ん坊と一頭の馬をもっていたが、二人はそれらのものすら自然から奪い去られてしまったのだ。二人の男女は俱知安のほうへ動いていった。椴松(トマツ)帯にさしかかった。まっすぐな幹が見渡すかぎり天をついて、怒濤のような風の音を籠めていた。二人の男女は蟻のように小さく、その林に近づいて、やがてその中に呑みこまれていった。

### ある感想

カインは、旧約聖書のアダムとイブの長男。弟にアベルがいる。二人は農業に従事するが、神はアベルの捧げものだけを受け入れ、兄のそれを受け入れなかった。

それで、カインは弟を殺害した、そのためにカインは神に追われ永遠の放浪を宿命づけられることになった。“カインの末裔”とは、救いようない永遠の放浪者を意味する。いまこの作品で、仁右衛門は、荒々しい北海道の自然の中で、自分の命と暮らしを守るだけにしか関心が無い。彼は、教養も分別も智恵もない、粗野で凶暴で、優しさの片鱗すらない人物だ。ただ、その周囲の

人間も、ただの欲得づくの行動原理を持っているだけ。人への感化力のなさといったら、仁右衛門と大差ない。こんな人間たちだけの社会を、作者有島武郎はキリスト教の精神で見ている。(有島自身はキリスト者であり続けながら、後年教会を脱会している) ゴーリキーの「どん底」にも、こういう人間ばかりが登場するが、たったひとり巡礼者ルカだけは「人間は互いに尊敬しなくちゃいけないんだよ」と言う。そんな徳義性すらこの作品にはない。ということは、この作品は、有島武郎自身の精神を投影したものか。西洋社会の経験のある作者にとってみれば、自分を観望するために、書いたものではなからうか——自分は、ひょっとしたら、この仁右衛門と同じではなからうか、と。

## Ⅱ ユスティニアヌス帝の危機～ローマ帝国衰亡史～

(E・ギボン 英) 岩波文庫 村山勇三訳

西ローマ帝国の崩壊から50年ほどたった5世紀の前半、東ローマ帝国は、ペルシャとの戦いも有利に展開していて、対外的には安定期になってきた。この時期に傑出した皇帝として上げられるのは、「ローマ法大全」を編纂させたユスティニアヌス帝(在位527年～565年)だが、彼は、在位5年目(532年)に「ニカの乱」が起こったときには、皇妃テオドラに助けられている。皇妃テオドラは「ニカの乱」で怖気づく夫、ユスティニアヌス帝を励ます場面は、まことに度胸のすわったもので、平生はおとなしい顔をしていても、ここぞというときに男を奮い立たせる女性である。彼女は反乱する民衆の前に夫とともに立ち、ひるまず夫を励ます。

「ニカの乱」とは、——現代流に言えば、ものすごく単純なことで野球場でファンが1塁側と3塁側に別れて応援している場面が多いが、この試合を、当時ローマ時代に大人気だった、2頭建ての戦車急送に置き換えることで真実にちかくなる。単純な競技の応援がヒートアップして、双方がそれぞれ敵意むきだしになり、やがて暴徒化し、「ニカ！」(勝利の意)、「ニカ」と叫んで、そのうち、鼻負チームのことよりも(当時は、青党や緑党という呼び方)、いつの間にか「税金を下げろ」とか、「軍役はやめろ」とかを叫ぶようになった。目の前に皇帝がいるものだから、当時の民衆は、遠慮なしに競技場で皇帝の悪口を言い合う。何しろ元老院というのがあり、そこで丁々発止の演説をやっていた国だから、こんなことは序の口だった。暴徒は、競技場だけでおさまらず、皇帝ユスティニアヌスは、身の危険を感じ、急いで宮殿に帰ったが、暴徒らは、宮殿にまで押し寄せた。それまで暴徒の発生は何度かあったが、このときの暴徒はすこぶる大規模だった。皇帝ユスティニアヌスは、近衛兵たちが逃亡用の船を用意してくれたので、それに乗り込もうとしたが、その時、皇妃テオドラが夫に「待った」をかけた。

皇帝はかつては百戦錬磨の将軍から皇帝になった。それが「三十六計、逃げるにしかず」と逃げようとしていた。テオドラはこう叫んだ——「皇帝の紫衣をかぶったときから、それが死装束になることぐらい覚悟があったはずでしょ。何をいまさらおめおめと逃げていくんです。『帝王の玉座は名誉の墓場なりという古諺』 同 VI p73,74 があるでしょ」それを聞いた皇はまるで鳩が豆鉄砲をくらったような顔だった。しかし、これで皇帝は気がついた、確かに、逃げてる場合じゃない、

まだ一戦も交えていないではないか、と。近衛兵がいたので彼らを指揮して反乱分子を押し返した。競技場のようなところだと、声がどよもしてものすごい反響になるので、恐怖を覚えるかもしれないが、宮殿の中に入れば、まだ、近衛兵としては、戦い方がわかっている。——それでうまく蹴散らすことができ、の乱は鎮圧できた。

ところで、そもそもこの皇妃テオドラという女性は異色の人で、どこかの国の王女様とか占領された国の美女とかではなく、その昔はサーカス団の踊り子だった。それが皇妃になどなったのは、まさしくシンデレラストーリーだ。生まれおちたのは、サーカス団の熊の飼育員アカキオスと曲芸師の妻との間の3人姉妹の真ん中の娘。彼女は歌はまあまあ、踊りもまあまあだったが、愛嬌をふりまくのが得意だった。つまり人の心を捉える、甘えるのがうまく、そのサーカス団がコンスタンチノーブルの町で興行をしているおり、ユスティニアヌスは彼女の評判を聞いた、その当時は、まだ彼の伯父ユスティヌス1世皇帝の後継予定者だったが、彼がいたく執心した。彼にはまだ妻がいなかった。純情な初婚だった。で、いくら大昔でも、こんな身分差の結婚はゆるされないのが建前だったので、伯父皇帝は、なんとこの結婚の例外を認めてやるために、元老院にそれを承認させた。こんな手続きやら反乱鎮圧やら、人生いろいろの夫婦だ。

## Ⅲ 孤客 (or 人間嫌い) (モリエール)

岩波文庫 辰野隆 訳

アルセストは親友フィラントのちょっとした振る舞いに気分を悪くし絶交だといひだした。フィラントは訳がわからぬ分らぬままに困惑。一方、アルセストは人間嫌いの評判をもつ一方で自家の未亡人セリメエヌに対しご執心で、しかも自分はセリメエヌから好かれていると思っている。彼女は未亡人ながら奔放な振る舞いで、男との付き合いはもともと上手いのだ。こんな彼アルセストだが、エリアント(セリメエヌの従妹)からは受けがよい。そこへオロントという気障な侯爵が彼女セリメエヌに求愛してきた。この当時の男のたしなみは、詩作にたしなみがあることだったから、オロントは自分の作った14行詩(ソネット)を彼女の前で披露した。そこへ彼が現われその詩をきいた。詩はなかなかの美文でほれほれするような内容だったが、彼は、恋敵のこのオロントが気に入らず、悔しさからオロントの詩をことごとく批判した。オロントは不愉快になり早々に退散した。彼女は彼に、「あなたは、“人間嫌い”というより人と喧嘩するのが好きそうですね」と皮肉る。そこへ彼女に、また別のアカーストという侯爵がきた。その侯爵は口さがなき人物で彼女は全く関心がない。彼女はこれをしおにこの場を離れ、今度はクリタンド侯爵の家に出かけていった。彼アルセストも態よく袖にされた。そこへある警吏がきた。これは貴族だけを対象にする貴族警察というものだが、その警吏はこのたびオロントの詩を侮辱した人物(アルセスト)を捜査しているのだそうで、警吏はそこにいる人たちにアルセストを見たら署まで出頭するようにと伝言を頼んでいった。

ところで、セリメエヌにはアルシノエという女の友人がいる。アルシノエは彼アルセストのことが好



きなのだが、そんな胸中を彼女に語ると、彼女は馬鹿にしたように、また対抗意識から、アルシノエに毒舌を吐いた。(セリメ)「あなた(アルシ)、魅力がないから嫉妬しているのね」、すると、(アルシ)「あなた(セリメ)、評判がお悪いようよ。わたし心配してあげています」といった具合だ。そこへ彼がきたので、彼女は「ちょうどよかったわ、ご本人と話しをされたら」と言ってその場を去った。アルシノエが彼に「あなたほどの人が、宮中からお声が掛からないのはとても残念です」と言うと、彼はアルシノエに「私は別段宮中のことなど頓着してはおりません。もともと宮廷とはそりが合わないのです」と軽くかわした。が、アルシノエは「そうですか。あなたの思い人(セリメ)の不実振りの証拠をお見せしましょう」と皮肉たっぷり話した。

ところで、彼は、自分に思いをむけるエリアントの画策で、彼女のオロント宛ての恋文を見せられた。そこで彼はそれを彼女に突きつけ「これで恥じないのか」と迫ったが、逆に「どうして？ 私があなたに？」と反駁されて拍子抜けした。すると自分を味方してくれたエリアントに「こんどは、あなたに愛をささげます」と言う。勝手なものだ。そこへ彼の下僕が血相を変えて、「旦那様、侮辱事件の裁判で敗訴しました」との連絡があったが、彼はそんなことは打っ遣り、彼女にぎゃふんと言わせたいとだけ考えていた。オロントも、エリアントとフィラントも、そして両侯爵までもが集まってきて、アルシノエが彼に、そら見たことかと「ひどい人ね」と言うと、彼は「放っておいてください」と遮断した。一方彼女もしゃあしゃあとしていた。肝心の彼は、今度は「私はこのたびのあなたの邪な行ないを忘れない。あらゆる人間を捨て、私と一緒に砂漠での生活に入りたい」と言いだすと、彼女は「冗談じゃないわ。わたしはまだ20歳代よ」ときっぱり拒絶した。彼アルセストは世捨人のような表情で、「いたる所で背かれ、不正不義にさいなまれた僕は、悪徳の栄える域から逃れて、正道の人間たる自由を得られるような地上の幽寂境を探しに出かけます」[同 p91](#) と独り独善的な言葉を残して去っていった。リアントとフィラントだけが、始末の悪い彼を追っていった。

## IV ヴェニスに死す (トーマス・マン)

[第1,2章]

グスタフ・アシェンバッハは初老の作家。主著は「精神と芸術」で、これはあのシラーの“素朴な文学と感傷的な文学の論究”に比肩されるほどに評判をとっている。作品に登場するのは、あらゆることの能動的に取り組む人物だが、これは実は彼の人生経験とは真反対の人物たちだった。彼はミュンヘンのプリンツレゲンテン街の自宅からいつもの散歩に出た。公園やそれにうちつづく街路をこえて、停留所を過ぎて、ウンゲラー通りを歩いていくとある斎場のお堂のところへ来た。そこで一人の皮帽をかぶった男を見かけた。その男が気になった。というのは、その男の人物性が気になったのではなく、その男の装いが旅行者ふうだったことから、かねて自分が深い心の底で、旅行に憧れていたのを思い出したからだ。彼の人生での居住経験は、

今の住まいと夏になったら出かける田舎の別荘くらいしか知らない。いつの日かどこか南の国で3週間ほどのんびりしたいと思っていたのだ。そうすれば、自分の作品の筆の運びもよくなるかもしれないと軽く考えていた。

[第3章]

彼は別荘に旅立った。場所はアドリア海の島で、イストリアの岸に近い。だが、そこへ行く途中ポーラの港で交通手段の選択を間違え、結局、荷物の行く先に合わせることにし、イタリアのヴェニスに向かうことになった。あまりきれいとはいえない船の一等船客となり、少し雨が あったが、寝椅子に転がり貧弱な食事につきあい、半日弱でようやくヴェニスに近づいた。サンマルコ水路に入ってから下船するまで1時間くらいかかった。町はごった返していた。彼は、このヴェニスを都市のなかでももっとも現実ばなれしたものと思った。彼は自分のトランクをリド(潟の中にある細長い遅滞)まで運んでもらうよう手配をとり、そしてゴンドラに乗り込んだ。ゴンドラの船頭は彼の意に反したような漕ぎ方をしていた。どうやら船頭はもぐり船頭で、あとで法外な船賃を要求しようと考えていたようで、船着き場で彼を下船させたのち運悪く当地の役人の姿を見るやいなや、そそくさと退散してしまった。彼は船着き場近くの広大なホテルの3階の部屋に身をおいた。

彼がホテルの外の散策から戻ってきたとき、ロビーには結構な数の客が、互いに無関心をよそおいながら食事の時間を待っていた。まのびした顔のアメリカや、イギリスの貴婦人、フランス人保母を連れたドイツ人、スラブ系の人も多くいた。中に家庭教師とおぼしき人に監督されたグループがいた。ポーランド語を話している。その中には15~17歳くらいの3人の娘がいたし、14歳くらいの少年もいた。その少年はギリシャ彫刻のような均整のとれた体つきをし、そして何よりも美しかった。姉ら3人はあくまでも質素をむねとした躰を受け、また挙措もそれにふさわしいものだったが、弟のほうはセーラー服を着て、好き気ままな振る舞いだった。幾年か前、彼はこのヴェニスに滞在したことがあるが、その時はこのにおいて不快な思いをしたことがある。それを再び経験するのかなど心配しながら、いっそのままこの地を去ろうか、荷物をほどくのをやめようかとさえ考えながら、朝食の席についた。昨日以来見知った客たちの幾人かが着席していた。おくれであの少年たちの家族もやってきた。彼はあの少年を見てから、さきほどまでの迷いを取り消し、彼らがいる限りここに滞在しよう決心した。

彼はこのホテルのプライベートビーチに出た。見知った客たちが寝椅子を砂地のところまで出して陽光を浴びていた。そのホテル客の中にもこの少年がいるのを見かけた。少年は子供たちと浜辺で砂の城を作って遊び興じていた。その会話から少年の名はタツジオと分かった。もう一人、少年の世話をやいている連れの男はヤアシユウといった。少年は海で泳いでいたが、そのうち家族に呼ばれて浜にもどって寝そべった。彼は浜辺で本を読みふけたが、そのうちホテルにもどり、そのあと街へ散歩に出た。シロッコと呼ばれる地中海独特の熱風のせいで、蒸し暑い空気がただとっていた。彼はゴンドラにのってサンマルコ広場にわたり、そこでレースやガラス細工の店を見てまわった。が、それにも飽きてホテルに戻ってきた。次の日は、正午頃、渚からもどってくるタツジオを見かけた。

#### [第4章]

やがて、彼の荷物が遅れて届き、に入れの服を着がえることができ、おちつきをとりもどした。するとここが快適な街のように思えてきて、自分の持論にたちもどり、芸術の深奥とは美を形で見せることだといよいよ確信した。その確信は、古代アテネの街でソクラテスがパイドロスに向かって美の概念を教えたときの確信と大きくは違わないと思った。彼は突然書きたくなった。いま確信につながった考えを書くにあたって、“美の形”を、タツジオを念頭に書きあげていった。彼は次の日、タツジオが渚に向かう時を見て声をかけようかとしたが、直前で声をかけそびれてしまった。気おくれしている点は、彼は自分でギリシャ神話のゼフェロス※と同じだ、と思った。

※ヒアキントスがアポロンを愛しているのを妬んだゼフェロスは、野原で円盤を投げて遊んでいてアポロンに西風を吹かせ、彼の投げた円盤がヒアキントスに当たるように仕向けた。ヒアキントスは死に、その時流れた赤い血のあとから赤い花が咲いた(ヒアシンス)。

ある日、タツジオ一家が食堂に現れなかった日があった。どうやら外出しているらしかった。夕方になって、彼が夜会用の服を着てロビーにいと、その一家が外から戻ってきた。そのときタツジオは彼に向かってにっこり微笑んだ。急なことで、彼にはどう反応してよいかわからず、結局、彼は何も返すことなくその場を去った。少年のほほえみは、彼にとってナルシスの微笑みのように思われた。彼は自室にもどって混乱した。そして自分の口をついて出た言葉は「わたしはお前を愛している」と。背徳の言葉だとは分かっていた。

#### [第5章]

日が過ぎていくにつれ、ホテルのドイツ人は少なくなり、彼だけとなった。少年一家はこの頃は渚にはおらず、サンマルコ寺院の方へ行っている。そこで、彼もひそかについていくことにした。確かに祈りの時間には、一家は前の席に座っていた。そこが終わってから彼らは街の通りを歩いており、彼もそれについていった。

ある夕方、ホテルの前庭に歌唱団が来て、音楽を奏で扇情的な歌を披露した。少年も来てそれを見ていた。歌が終わると、下卑た男が帽子をまわしてきた。彼が気前よく紙幣を押し込んでやると、男はえらく喜んだ。男が中央へもどり、あらためて歌手が一曲を披露した。彼が少年の方へ目をやったとき、少年も彼に視線を投げかけてきたが、それは彼にとって大きな喜びだった。今夜の見世物はこれで終わった。

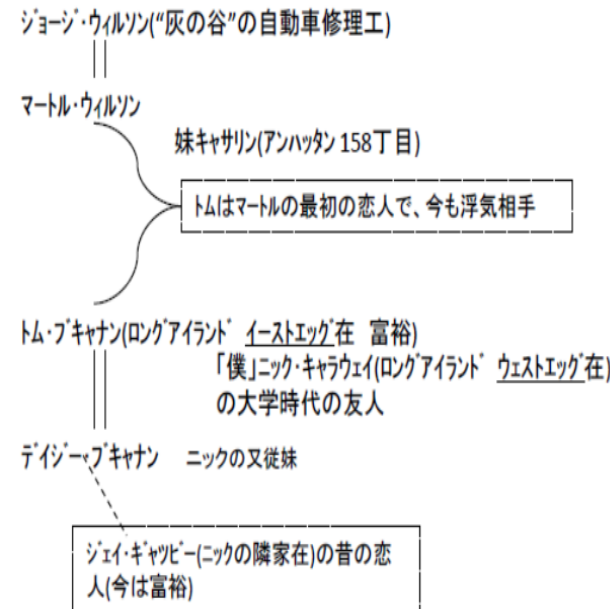
生暖かい風が吹いていた。シロッコと呼ばれるもので、昔からしばしばヴェニスに怖い疫病をもたらしてくるものだ。ヴェニスではこの兆候が起こったときには、観光客らを失わないために官憲がそれを秘密にするのだそうだ。きょう彼は怪しい男から、いままさにそんな状況にあるのを知らされた。彼は少年一家に、それを知らせようかと思ったが、そこまで強い気にはならなかった。彼はその夜、生贄にされる雄やぎの夢を見た。やぎに群がる者らの姿におぞましさを感じた。目をさましたときには息が荒くなっていた。その朝、ホテルの渚は人がほとんどいなかった。秘密がもれたのだろう。だが、少年一家はまだいた。

彼はホテルの散髪屋に行った。よくしゃべる店主は、官憲の禁令を守り、街の衛生状態のことはしゃべらなかつた。ただ平静をよそおいながら、「もっと男前になるようにいたしましょう」と

特に念入りにやってくれた。お蔭で彼の白髪は隠れ、肌も色艶がよくなったようだ。彼は気をよくしてホテルを出た。そして、ちょうどうまく少年一家が外出するのにいっしょになった。彼は気を高ぶらせ、それについていった。タツジオは彼のついてくるのを勤付いていたが、決してそのことを、前を歩く家族には言わなかつた。それが彼にはうれしかった。でも、ある橋をわたりきつたところで、彼は少年らの行方を見失ってしまった。しばらくしてから諦めた。もう体が疲労の極みとなったのだ。喉を潤おそうと果物屋でいちごを買ってすぐに食べた。薬屋では石炭酸を買って、それで少しは元気を取り戻せたようだ。数日たって、ロビーは閑散としていた。ポーランド人家族も今日でここを去るとのことだった。少年タツジオはそれでも時間間際まで渚でヤアシユウとふざけ合いをしていた。だがそのふざけ合いは度が過ぎてしまい二人に後味の悪いものを残したようで、タツジオは急に独り砂州の方へはだしで歩いていった。彼は渚の番小屋近くの寝椅子から、タツジオのことを終始見つめていた。その直後のことだが、彼はその寝椅子のところで亡くなった。

#### ●ある感想

彼自身の芸術観がよく出ている。『美とは、われわれが感覚的に受けとり得る、感覚的にたえ得る、精神的なものの唯一の形態なのだ』、『愛する者は愛される者よりも一層神に近い』と確信するトーマス・マンにとって、幸福とは感情と思想を“目に見える形”で一致させることができる点にあるのだろう。彼アシェンバッハが突然死ぬが、彼がその形をタツジオにおいて見ることでできた点を“満足”としたかったと想像する。



## V 華麗なるギャツビー スコット・フィッツジェラルド

(第1, 2章)

1915年、ぼくニック・キャラウェイはイエール大学を卒業し、界大戦に従軍した。帰還して1922年の春にNYの証券会社に就職した。住んだのはロングアイランドの湾内の卵型に突きだした二つの区域(ウェストエッグWEとイーストエッグEE—架空)の西部分WEだった。トムの隣家にはギャツビー氏という金持ちいて、しばしば派手なパーティーを開いていた。一方、東部分EEには大学時代の友人トム/デイジー・ブキャン)夫婦がおり、このデイジーはニックの又従兄妹だ。この夫婦宅にはジョーダン・ベーカーという女子プロゴルフの選手が同居していた。このベーカーから聞いたことだが、トムはNYの



マートル・ウィルソンという、亭主持ちの女と不倫関係にある。その亭主のジョージ・ウィルソンというのは、NYロングアイランドの中間あたり、灰の谷と呼ばれる、自動車道路と鉄道線路の合流点——荒涼としているのでそう呼ばれる——あたりにある動車修理業の男だ。

(第3章)

さて、こちらギャツビーの屋敷内のことだが、連日パーティが開かれ、ブキャナン夫妻もウィルソン夫妻も招かれたことがある。ニックも隣人ということで招かれた。料理は豪勢でまた楽団も出ている。舞台ではダンスが始まりジャズも演奏され、筒抜けの爆笑がおこっていた。

(第4章)

1922年7月のある日、ニックはギャツビー氏の家から車がでてきてドライブに誘われた。その車中、ギャツビーは自分の略歴を簡単にふれた。彼は中西部の資産家で大学はオックスフォード——従軍した戦争で出世して今日があるとのこと。心象ではクイーンズボロ橋から眺めたNYがいいそうだ。ニックはジョーダン・ベーカーとプラザホテルで会った。彼女は、昔のことを教えてくれた。たとえばデージーだが、1917年10月頃、デージーは若い士官たちにえらい人気だったところ、その中で当時少尉のジェイ・ギャツビーが彼女の心をつかんだ。だがちょうど彼は兵役となった。一方デージーは、シカゴのトム・ブキャナンと派手な結婚式をあげた。だがしばらくののち、トムが自分の運転する車を大型荷馬車にぶつけるという事故を起こしたときに、トムがあるホテルの寝室係りのメイドを乗せていたのが明るみに出て、以来デージーはトムの浮気を疑うようになった。ジョーダンはこんな舞台裏の話のほかにもう一つ重要なことを言った。それはギャツビー自身、その後デージー夫婦が、EEに住まいしているのを知って、自分もその近く、WEIに邸宅物件をさがし、そこに落ち着いたという点だった。ギャツビーはニック経由でデージーを自宅に招きたいと考えているのだろう、とニックは想像した。

(第5章)

ギャツビーにはその想像どおりのことをした。そこで、「ジョーダンから話を聞きました。あしたデージーに電話して、お茶を飲みに来てよ」と話すと、これで話はまとまった。明後日のこと、篠つく雨の日だった。これが幸いし、ニックの家に来る訪問客は少ないようだ。午後4時になってきたのはデージーだけだった。彼女は明るく微笑しながらニックを見ていた。その後すぐに、緊張しやや青ざめていたギャツビーが来た。デージーは「ずいぶん何年もお会いしませんでしたわね」とデージーが言った。それはちょうど5年になる。二人は思い出話をした。そのうち雨が上がりだしたことから、ニックの家の隣家のギャツビーの屋敷に移った。建物それ自体は、見るべきものがあった。確かに部屋の中は沈黙が支配的だったが、だんだんと彼ら二人顔は輝くようになり、歓喜の言葉や身振りが自然と湧き上がってきた。彼らは明らかに幸福感にひたることができた。二階では下宿人クリップスプリングー氏にピアノを弾いてもらい、こうやって時間がたったが、ギャツビーの顔に困惑の色がもどってきた。『彼は創造的情熱を傾けて自己の幻影に没入し、しじゅうその幻影を増大せしめながら、思うままのあざやかな羽毛でもってすっかりそれを飾り立ててしまったのだ。しかし、どれほど熱烈な情熱をもってしても、男が胸の中に育む幻を完全にみたくすることはできない。』 新潮文庫

野崎孝 訳 p128

(第6章)

ギャツビーは、ノース・ダコタ州の生まれで本名は、ジェームズ・ギャツツと言った。17歳のときに、スピーリア湖に浮かんでいた、モンタナ銅鉱山で大金持ちになっていたダン・コウディのヨットが、危うく座礁する直前にその危機を連絡したことで、同氏からその後格別の礼を受けたことをきっかけに社交界や出世の機会をうけ、名を今のように改めたという経緯がある。その後同氏は病没し、莫大な財産の一部が、ギャツビーにも流れてきた。そういうわけでギャツビーは、パーティ三昧というわけだった。

さて今日のパーティでは、ゴルフのジョーダン・ベーカーのほか、美人女優もきていたニックは酒が過ぎ酔態がひどかったが、それなるに会話が弾んでいた。デージーはギャツビーとダンスをした。彼のステップは軽快だった。それを横目に見ていたトムは、こっそりニックに、「ギャツビーというのは何者なんだ？ 酒の密売王か？」と訊いたほどだ。ギャツビーはかねてからの念願のかなったパーティーだったのに、それでも、「あの人(デ)はどうやら楽しくなかったのでは——」と気にしていた。ニックは慰めのつもりで、「ぼくは無理な要求はしないけどなあ。過去は繰り返せないよ」といったが、ギャツビーはすぐさま「繰り返せますよ」と反論した。そして、『**やっきとなつてあたりを見まわした。彼の家が影を落としていこの庭の、どこか手をのばせばすぐ届く所に過去が潜んでいるように。**』 同 p147 彼ギャツビーは何かを取り戻そうとしていた。ギャツビーは口の中で言葉を紡ごうとしたが、それは結局、言葉にならなかった。

(第7章)

このごろギャツビーのパーティは開かれなくなった。トムの家でのことだが、トム/デージー夫婦(夫婦の幼児は保母に預けて)とジョーダンのほかにニックもギャツビーも招かれ、そのうち興に乗って、皆で車でNYへでかけることにした。ジョーダンとニックとトムはギャツビーの車で、ギャツビーとデージーは(トムの)クーペで運転した。前者の車内では、トムは、ギャツビーの話をもちだし、彼のオックスフォード卒への疑念、デージーが以前から懇意であること背景について探りたくしていた。その道中、灰の谷で、トムはジョージ・ウィルソンのところで給油をした。給油中の会話のなかで、ジョージは、近く西部へ引っ越すと語った。トムはこの給油所の女房マートルと不倫関係を持っているのだが、これに気づいているニックは、トムとジョージの双方を見つめていた。車を運転するトムはこの給油をさかいに激しい焦燥を感じていた。マンハッタンに入ってから、両の車は50丁目あたりでとまり、今後の予定を確認した。まずはひとまず、セントラルパーク南のプラザホテルのスイートルームに落ち着いた。季節は夏の盛り、午後4時はまだまだ炎暑だったからだ。一同はミント・ジュレップを注文した。ここでもトムはしつこく、ギャツビーの学歴のことを持ちだしたが、そして「ギャツビー、君はわが家にどんな騒動を起こそうというんだ？」ととうとうあからさまに訊いた。がギャツビーは動じなかった。皆が皆しりけ切ったときに、ギャツビーは、「**奥さんはあなたを愛していません。これまでも愛していなかった。奥さんはぼくを愛しているのです**」 同 p175 両者は言葉の応酬をした。ギャツビーは、自分が貧乏だったので私を待ちくたびれたからだ、それが5年前のことだった、と説明した。トムは、俺はデージーを愛していると言った。だが間髪を入れず、デージーが、「あたし、あの人(トム)を愛したことなんかない」と多少のためらいがあったが、言い直した。「かつて

はトムを愛してた——でもあなた(ギャツビー)のことも愛してた」最後は、デージーが「別れましょう」と言い、トムはギャツビーへの腹いせに、「お前の調べはついている。お前は、ウルフシェイム一味と結んでここやシカゴのドラッグストアを買収して、おおっぴらにメチル・アルコールを売りやがったんだ」と言ったが、ギャツビーは「それがどうしました」で自分を制した。度を越した興奮は収まった。周囲の人間がそれぞれに動き出し、ロングアイランドに戻り出した。

ところで”灰の谷”まで来たとき、この彼らの車が自動車修理業ジョージの女房マートルを轢いてしまい死に至らしめた。警察がきて、目撃者からいろいろ聴取したが、その場で得られた事項には限度があった。やがてNY旅の一行は、気まずい事故から離れ、ようやくロングアイランドの、まずはトム・デージー宅まで戻ってきた。実は、マートルを轢いた車は、デージーが運転していたのだ。デージーが「別れましょう」と言って切り上げた。トムはギャツビーへの腹いせに、「お前の調べはついている。お前は、ウルフシェイム一味と結んでここやシカゴのドラッグストアを買収して、おおっぴらにメチル・アルコールを売りやがったんだ」と言ったが、ギャツビーは「それがどうしました」で自分を制した。度を越した興奮は収まった。周囲の人間がそれぞれに動き出し、ロングアイランドに戻り出した。ギャツビーはその時のことをつづさに記憶していた。実はスピードを出しすぎたデージーを制しようと、ギャツビーが急ブレーキをかけたのだが、それで彼女はギャツビーの膝にくず折れてしまった。そこで、ギャツビーが運転を継続したというのだ。その直後に事故は起こった。——デージーとトムはイーストエッグの自宅に戻り、ひっそりと向かいあうだけだった。ニックはその静けさが心配で、こっそりヴェランダにあがり、二人の様子を確かめた。そしてギャツビーに報告した。ギャツビーはギャツビーで不寝番で家の見張りを続けた。

(第8章)

次の早朝、ギャツビーは自身の貧乏時代のことをニックに語った。——ギャツビーが初めてデージーを見たのは、他の将校連中とある家に出かけていったのがきっかけだったある十月の夜、ギャツビーはデージーを奪った。だがこのとき、ギャツビーには資力がなかった。だが良家の娘、彼女はずっと本気だった。彼にすればどこかの時点を自分を捨ててくれればちょうどいいと思っていたがそうではなかった。そしてギャツビーの出征前日、『彼はデージーを抱いて、長いこと黙って坐っていた。寒い秋の日で、部屋には火がはいり、彼女の頬は燃えていた。』 同 p201 大戦で彼は抜群の武功をたてた。大尉から少佐へ、機関銃隊の指揮官になって終戦。その後、変な経緯からオクスフォード大学に入った。だが、彼女にすれば帰還できない彼の事情が分からなかった。彼女にとっては、ただただ自分が惨めだった。そんなころ、彼女はトム・ブキャナンと知り合い、結婚したのだった。——ニックはそう聞いた。その別れ際、ニックはギャツビーに言った。「あいつらはくだらんやつらですよ」、「さよなら、朝ご飯、楽しかったよ、ギャツビー君」

例の事故のことで、今日も妻を亡くしたジョージ・ウィルソンは、どうしても真相を突き止めたくて、ロングアイランドのギャツビー邸までやってきた。この日のギャツビーは午後、自宅のプールにいた。だが経緯不明ながら、その後プールに浮かぶマットレスのうえで死んでいた。運転手はなにやら銃声が聞こえたらしい。そのプールの際、どういうわけかわからないが、このほかジョージ・ウィルソンの死体も、傍らの芝草の陰にあった。

(第9章)

警察の聞き込みにはニックがするよりほかなかった。トムもデージーもどこかへ姿を消した。ギャツビーの父親がミネソタ州から葬儀のためにやってきたのでこれにはニックが対応した。それら一切を片付けてからニックは浜辺に出て、漫然とギャツビーのことを思ってみた。『ギャツビーが、デージーの家の棧橋の突端に輝く緑色の灯をはじめとつけてときの彼の驚きを思い浮かべた。彼は長い旅路の果てにこの青々とした芝生にたどりついたのだが、彼の夢は、あまりに身近に見えて、これをつかみそこなうことなどありえないと思われたにちがいない。しかし、彼の夢は、実はすでに彼の背後になってしまったことを彼はしらなかったのだ。NYのかなたに茫漠とひろがるあの広大な謎の世界のどこか、共和国の原野が夜空の下に黒々と起伏しているあのあたりにこそ、彼の夢はあったのだ。』 同 p243

## VI スラブ精神の一顕現～大地と人間は血脈でつながっている～

- ①“風土”(和辻哲郎)や「アジアは一つなり」(岡倉天心)のように考えると、大地で出会う相手は、【砂漠】では、「敵か味方か」と身構える。——— 神教の素地  
【黒海にそそぐドネステル川以東～中国東北・沿海州までのユーラシアステップ】では、「**自分自身 or “神” or 正義**」と考える——— 多神教の素地 (cf. 日本ならば山川草木悉皆神)
- ②スラブ民話「王様の耳はロバの耳」——— 王様の秘密を知った床屋は、大地に穴を掘ってその秘密を叫んだ。すると、今度は草原がその秘密をささやき、唸り、叫びだした。
- ③ローマ法王ヨハネ・パウロ2世(ポーランド出身)は1981年の来日時、羽田空港のタラップ下でまず大地にキスをした。ロシア正教の大聖堂では人々はアイコンにキスをする。

④「罪と罰」(ドストエフスキー)

ラスコーリニコフから、金貸し老婆殺害のことを吐露された恋人ソーニャは、彼にこう言った。『**すぐ、今すぐ行って、四つ辻に立って、身を屈めて、まずあなたが汚した大地に向かって接吻しなさい。それから全世界に向かっておじぎして、四方に向かって、みんなに聞こえるように——「わたしは人を殺しました！」** こうおっしゃい。そうすれば、神さまがまたあなたに生命を授けて下さいます。』

岩波文庫 中村白葉 訳 III p124

